

**令和 7 年度第 1 回カタクチイワシ太平洋系群・瀬戸内海系群資源評価担当者会議
議事概要**

日時: 令和 7 年 9 月 16 日 (火) 13:00-15:20

会場: Web (Microsoft Teams によるオンライン会議)

参加機関: 26, 参加者: 55 (有識者含む)

令和 7 年度カタクチイワシ太平洋系群・瀬戸内海系群資源評価担当者会議において、カタクチイワシの繰入れに関する試算方法の更新と試算結果についての検討が行われた。これらの結果についての質疑の後、有識者による講評が行われた。なお、試算結果については、事前提示資料および会議内で説明に用いた漁獲圧の設定値に瑕疵があったため、結果の数値の更新および文言の修正を行ったのち資料を回覧し、機構HPにて公表される予定である。

質疑応答等の概要は以下の通り。

【カタクチイワシ瀬戸内海系群】

有識者: 検討の方向性には異論はない。確認であるが、シナリオの0と1の比較で、シナリオ 0

(S0) よりもシナリオ 1 (S1) の漁獲量と親魚量が減っていく原因は何か？

水産研究・教育機構(以下、機構): S1 は加入が少なかった場合に漁獲圧が高くなりすぎてしまうケースなどで、資源が崩壊するシミュレーションが表れる。そのためシナリオの平均的な結果として資源量・漁獲量が小さい結果が示されている。

有識者: 毎年、前年に行った繰入れ分を返却して、また借りるというシナリオの認識で良いか？ 表 4-7 について、漁獲量の平均変動率の値は桁が大きい、単位は%か？

機構: その通りである。

参画機関: 将来予測の計算方法について、この ABC は、数量か F か？

機構: 試算は前年に算定した ABC 量を漁獲することがベースになっている。

参画機関: 漁獲数量が ABC となるように F を調整しているということか。

機構: その通り、一方で F の上限の設定の妥当性については検討の余地がある。

機構: (補足) 基本的には漁獲量で管理をして、その漁獲量を取り切れるほど資源がいない時に F の値に上限を設定するという形で計算を行っている。

有識者: F の上限をつけることで、現実に近いシミュレーションになったと理解した。管理開始当初の 2、3 年は変動が大きく(特に漁獲量)、次第に段々変動が小さくなっていくのはなぜか？

機構: 初年には繰入のみを行う漁獲となるため、資源に影響を与えるので一旦は減る。その後は返却があるため変動が小さくなると考えている。

有識者: 年数が経つにつれて資源が上振れ・下振れするというのがランダムに表れるが、平均値で見ると変動が緩やかになっているという理解でよいのか？

機構:詳しくは確認できていないが、そう解釈している。

有識者:実際に繰入れを行う場面を考えると、漁期の途中まで漁獲が進んだ時に資源が上振れている場合に繰入れが行われるだろう。加入が低調であった場合など、資源が過大評価された場合は、実際の資源は少ないのに TAC が過大に設定され、繰入れが行われないと考える方がより現実的である。今回のシナリオだと、毎年繰入れを行い、資源が下振れしている時も繰入れを行うことになるが、これは現実的なのか？資源が下振れした時に繰入れをしない場合を考慮できると管理開始直後の大きな変動はもう少し均されるのではないかな？

機構:より現実に近い設定があるというのは認識しており、どういった設定にすれば良いかは今後の課題である。シナリオ4(S4)は、繰入れがある場合とない場合を考慮しており、そういう意味では最も現実的なシナリオである。

有識者:S4 は、繰入れの有無がランダムなため、資源が下振れした時でも繰入れを行うケースが含まれ、現実的であるとは考えづらい。F の上限設定に関連しても、現実には、ABC に実際の漁獲量が届かない場合がある。こういうケースは F の上限設定では考慮できない。F に上限を設ける他に、たとえば β を 0.1(1 割届かなかった場合)引き下げるようなシナリオなどが現実に近いシミュレーションとなるのではないかな？

機構:確かにその通り。今回は獲りきるという設定で計算した。

有識者:漁業者に説明した時に、現実を反映していないと課題になりうる点は留意いただきたい。

機構:(補足)加入量の上振れ・下振れで繰入れの有無が決まる視点は良いアイデア。TACが消化されてから繰入するのが理想的だが、それが難しいので繰入が検討されているところもある。

機構:18 枚目の漁獲量の年変動について、平均年変動率が S3 で急に変動が大きくなる。各試行でのプロセスを細かく確認し状況を把握しておくといい。

機構:承知した。

機構:(補足)マアジ対馬暖流系群の研究機関会議資料では中央値を示している。こちらに差し替えたい。

【カタクチイワシ太平洋系群】

有識者:コメントは瀬戸内海と同様である。現実的なシミュレーションの設定の一案として、F の最高値に上限をつけるよりも、 $F_{current}$ で漁獲した時に ABC に達しない資源水準であれば繰入を行わず、ABC を超えてしまうような資源水準の時には繰入れを行う、など試してはどうか？

機構:検討を進めたい。JV の皆様のご協力もお願いしたい。

機構:現実的な将来予測とルールとして持続的なルールとして適切かは分けて議論すべき。今回のシナリオでは繰り入れも含めて最大限に漁獲したとしても漁業法の枠組みで目標を達成できるという意味合いを持っている。

有識者:その通りであるが、資源が下振れしたときでも繰入れをするような、現実にはあり得ないルールリスク評価には疑問がある。現実により得る設定の中で検討した方が良いのではない

か。

機構: 資源下振れ時のFは過去のFの変動からみられるので、そういう意味で上限設定は現実的になったと思う。

有識者: その主張は理解できる。資源が少ない時にまで繰入をするのが現実的かは疑問に思う。

機構: 現実には漁獲量を一定にしたいというインセンティブもあり、資源が下がればABCが下がるので、ABCが下がると困るのでABCを一定にするという考えもある。どれが現実にかかるかが分からない以上、どういう状況が現実的であるかを固めてしまうことの危険性も感じている。

有識者: 承知した。ただし、シミュレーションがどのような意図で行われたのかが、現場の人にも誤解がなく伝わる書き振りで、報告書でも説明するべきである。

機構: 今回の報告については水産庁からの依頼への返信として作成した。ルールを作る上では出来るだけ安全かつベネフィットがあるものがよく、リスク評価としては個々の資源について繰入が行われる条件・設定なども細かく精査しシミュレーションを行う必要があると考えているため、今後は水産庁のオーダーとはべつの話として出来る範囲で幅広く検討していきたい。カタクチイワシはパイロットケースとして進めているところがあるので、これからもアイデアを出してもらえればと思う。また、繰入れルールそのものに魚種横断的な検討っていうのもお願いすることになるかもしれない。

機構: 現状を反映するシミュレーションは複雑になるが、さらに複雑にするのが良いとは限らない。過去にどのような漁業がなされていたか(Fと資源量の歴史的な関係等)を整理することは、現実的かつ実証的なシナリオを作る上で重要だと思う。

【その他】

なし

【有識者講評】

有識者: 大変お疲れ様でした。水産庁からの要望に対して丁寧に検討されていると感じます。また、瀬戸内海系群の資源評価はシラスを含めていないため、今回のような繰り入れなどを検討する場合、シラスを主に漁獲している漁業についても合わせて考えていく必要があるとは感じている。シラスの資源管理も今は行っていないが、将来的には合わせて考えるべき問題であるため、今後の課題として認識しておいていただきたい。

有識者: 議論の途中もあったように、カタクチイワシはパイロット的な魚種に相当していると思う。繰り入れなどを検討する上で、いろいろなオーダーが出てきて担当者は大変だと思うが、今後の管理に向けては避けて通れない大事なところなので頑張って欲しい。

以上